



Title	マルシリオ・フィチーノにおける哲学と宗教
Author(s)	伊藤, 博明
Citation	基督教学, 17: 22-24
Issue Date	1982-07-19
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46408
Type	article
File Information	17_22-24.pdf



[Instructions for use](#)

マルシリオ・フィチーノに おける哲学と宗教

伊藤 博明

イタリア・ルネサンスの最盛期に位置するマルシリオ・フィチーノ (Marsilio Ficino 1433-99) は、プラトン、プロティノス等をラテン訳することによってヨーロッパにおけるプラトンの伝統の復興に大きな役割を演じたが、同時に旺盛な思索活動を続け、その中で哲学と宗教（プラトン主義とキリスト教）の根本的一致を説いた思想家でもあった。

フィチーノは彼の主著『プラトン神学——靈魂の不滅について——』Platonica Theologia de immortalitate animorum⁽¹⁾ において、すべての哲学的営為は最終的に神へ向けられるものであって神の崇敬から切り離されるものではなく、むしろその前提となるものであると主張している。そして『プラトン神学』に続いて執筆された『キリスト教について』De christiana religione⁽²⁾ では、哲学と宗教の関係が詳しく論じられているので、以下こ

の著作を中心に考察を進めることにしたい。

フィチーノはこの著作の序文で「知恵と宗教の間には最大の類似がある」と述べている。われわれ人間の靈魂は、知性と意志をいわば兩翼として天上の父へと飛び帰ることができるが、この時「哲学者は知性に基つき、聖職者は意志に基づいている。そして知性は意志を燃やし、意志は知性を燃やす。」すなわち、哲学と宗教は相互に不可欠のものであって、両方を備えた靈魂だけが神へと至ることが可能になるのである。フィチーノによれば、古代の聖なる人びと（ヘブライ人、ペルシア人、エジプト人）は、同時に哲学者でもあり聖職者でもあった。ところが、すぐに知恵と信仰が分離する時代がやって来た。宗教は無知によって汚されて迷信と呼ばれるものとなり、また哲学は不敬によって汚されて悪徳に満ちたものになってしまった。そこでフィチーノは「神の聖なる贈物」である哲学を不敬から解き放ち、聖なる宗教を呪うべき無知から救い出そう、と呼びかけるのである。

知恵と信仰（哲学と宗教）が結合されている状態を理想とフィチーノは考えているのであるが、その時彼が念頭に置いているプラトンの哲学とキリスト教の関連について、より具体的に明らかにされなければならない。そ

のためには、フィチーノにおける「宗教」の概念に立ち戻って考察する必要がある。『キリスト教について』第一章は「宗教は人間にとって最も固有で真なるものである」と題されている。換言すれば、宗教は人間にとって「自然本性的」なものである（この表現は『プラトン神学』に見られる）。すなわち、宗教は人間を動物から区別するものであり、宗教を持つていることが人間の尊厳と他の動物に対する卓越のあかしとなるのである。

それでは、人間に固有なもの、自然本性的なものといわれる宗教の中で、キリスト教の優位性はいかにして導かれるのであろうか。フィチーノによれば、すべての宗教は万物の創造主である神に向けられるかぎりで、善なるの、真なるものである。ところでキリスト教は、より善なるもの、より真なるものであり、神を真正に崇敬するのは「生の師であるキリストと彼の弟子たちが教えたような仕方」で、神を崇敬する人びとなのである。総じてキリスト教の優位性についてのフィチーノの説明は、「一種の確信に近いものであるが、その有力な証拠として彼はキリストの受肉の問題を考えていたように思われる。

そして、このキリスト教の出現を、フィチーノは神の摂理の一つの成就として歴史的に捉え直す。神の摂理は、

様々な時と場所において様々な宗教的形態（祭儀）が存在することを許したが、キリスト教を唯一最高の宗教として出現させた。キリストは、それ以前の宗教が欠いていたもののすべてを実現した者として理解されるばかりか、またそれ以前の哲学が欠いていたものをも実現した者とされ、キリスト教と異教の哲学の関係も定められることになる。「古代の神学者たち」（ゾロアスター、ヘルメス・トリスメギストス、オルフェウス、ピュタゴラス）はヘブライ人の預言と啓示に基づいており、それらすべてがプラトンの哲学の中に入り込み、それゆえプラトンは「アッティカ語を話すモーセ」と呼ばれた。そしてキリスト以後は、新プラトン主義者たちがヨハネ、パウロ、ヒエロテオスの教えを受け取ったとされるのである。

以上述べたことから、フィチーノにおける哲学と宗教（プラトン主義とキリスト教）の問題について、次のようにまとめることができるだろう。すなわち、哲学と宗教（知恵と信仰）は、同一の目的（神）を目指すものであり、お互いに分離できぬものとして結びついている。「哲学は宗教が崇敬するものを探求する」³⁾のであり、宗教は哲学を導き、哲学は宗教を確かなものとする。そして、この哲学と宗教の結合は古代から存在し、神の摂理が支配

する聖なる歴史においては、プラトンの哲学とキリスト教の結合において最高のものとして現われる。

フィチーノはある書簡で次のように言っている。「もし哲学が万人によって真理と知恵の愛と研究と定義されるならば、そしてさらに、真理と知恵自体が唯一の神であるならば、正しい哲学は真の宗教以外の何ものでもないし、また正しい宗教は真の哲学以外の何ものでもない。」哲学は「敬虔なる哲学」であり、宗教は「学識ある宗教」であらなければならない。この哲学と宗教の根本的一致という理念に促されて、フィチーノは、アウグスティヌス以来分離していたプラトン主義とキリスト教を再結合しようとし、その作業を『プラトン神学』において試みようとしたと理解できるのである。

註

- (1) Marsile Ficini, *Theologie platonicienne de l'imortalité des âmes*, text et traduit par Raymond Marcel, 3 tomes, Paris, 1964-1970.
- (2) Marsilius Ficinus, *Opera omnia*, Basel, 1561 (rpt. Torino, 1959) pp. 1-81.
- (3) Cf. Ardis B. Collins, *The Secular is Sacred: Platonism and Thomism in Marsilio Ficino's Platonic Theology*, Hague, 1974, chap. 6.

- (4) Ficinus, *Opera omnia*, p. 668. cf. *The Letters of Marsilio Ficino*, Vol. 1, London, 1975, p. 187.